

〈研究ノート〉

幼児用情動コンピテンス尺度の検討

——評定者間（養育者・保育者）の比較および気質との関係——

西 元 直 美*

Examination of an Emotional Competence Scale for Young Children: Comparison between Raters (Caregivers and Nursery Teachers) and Relationship with Temperament

Naomi Nishimoto

要旨：本研究の目的は幼児用情動コンピテンス尺度について検討することであり、具体的には評定者間の比較および評定者間の関連についての検討と、幼児用情動コンピテンス尺度と気質尺度との関連についての検討を行うことである。3歳児の養育者とその保育者に対して幼児用情動コンピテンス尺度と気質尺度への回答を求めた。両者のデータを分析した結果、情動コンピテンスは保育者よりも養育者のほうが高い得点であること、両者に相関関係がないことが示された。また、両者のデータを用いて情動コンピテンスと気質との相関関係を分析した結果、養育者評定においては情動コンピテンスとエフォートフル・コントロールとの関連が示された。以上のことから、評定者間の違いについては今後も引き続き検討すべき課題であることが考察された。

Abstract: The purpose of this study is to examine an emotional competence scale for young children, specifically a comparison between raters and the relationship between raters, and the relationship between the emotional competence scale for young children and temperament scale. We asked caregivers of 3-years-olds and their nursery teachers to answer an emotional competence scale for young children and the temperament scale. Analysis of data from caregivers and nursery teachers showed that caregivers scored higher on emotional competence than nursery teachers, and there was no significant correlation between them. As a result of analyzing the correlation between the emotional competence scale for young children and temperament scale using data from caregivers and nursery teachers, it showed a relationship between emotional competence and effortful control as rated by caregivers. Therefore, differences between raters are an issue that should continue to be examined in the future.

Key words： 情動コンピテンス emotional competence 尺度 scale 幼児 young children 気質 temperament

I 問題と目的

自分と他者の情動を認識し、調整し、自分の情動をうまく利用できる能力、情動を扱う能力は「情動コンピテンス (Emotional Competence)」あるいは「情動知能 (Emotional Intelligence)」と呼ばれる。情動知能は「自己の感情 (feeling) や情動 (emotion) を認識して、違いを識別し、その情報を思考や行動に活かす能力」と定義され (Salobey & Mayer, 1990)、さらに「情動の知覚

(perceiving emotions)」、 「情動の使用 (using emotions)」、 「情動の理解 (understanding emotions)」、 「情動の管理 (managing emotions)」の4つの要因から構成されるものされている (Mayer & Salovey, 1997)。「情動の知覚」とは情動を評価したり表出したり理解することであり、「情動の使用」とは思考を促進するように情動を利用すること、「情動の理解」とは情動についての知識を理解する能力であり、「情動の管理」とは情動を調整する能力である。また、いくつかの研究において情動コンピテ

受付日 2024. 5. 19 / 掲載決定日 2024. 9. 25

*関西福祉科学大学 教育学部 教授

ンスの高さは良好な対人関係を築くことや対人関係の満足度に関係することが明らかにされている (Schutte et al., 2001; Lopes, Salovey, Coté, & Beers, 2005; Smith, Ciarrochi, Heaven, 2008)。

こうした情動コンピテンスは成人を対象とした研究が多く、成人の情動コンピテンスの測定には MEIS (Mayer, Caruso, & Salovey, 1999)、MSCEIT (Mayer, Salovey, Caruso, & Sitarenios, 2003)、ESCQ (Takšić, 1998)、TEIQue (Petrides & Furnham, 2003)、WLEIS (Wong & Law, 2002) などがあり、日本版としても日本版 ESCQ (J-ESCQ) (豊田・森田・金敷・清水, 2005; Toyota, Morita, & Takšić, 2007) や日本版 WLEIS (豊田・山本, 2011)、改訂版 WLEIS (野崎, 2017) などが用いられている。また、WLEIS や ESCQ から作成された中学生を対象とする中学生用 J-WLEIS、中学生用 J-ESCQ (豊田・桜井, 2007) や、中学生用 J-WLEIS と中学生用 J-ESCQ の表現を小学生用に修正し、中学生用 J-WLEIS の下位尺度に対応して作成された児童版情動知能尺度 (豊田・吉田, 2012) によって中学生や小学生の情動コンピテンスの測定も試みられ、中学生や小学生を対象とした情動コンピテンスに関する研究もなされている。

情動コンピテンスには情動の理解や情動の調整が含まれるが、情動の理解は発達初期から可能であること示す研究はいくつもある。乳児期から視線や行動などの非言語的指標によって表情の識別が可能であること (Ludermann & Nelson, 1988; Kotsoni, de Haan, & Johnson, 2001; Young-Browne, Rosenfeld, & Horowitz, 2013) や、2 歳頃から情動に関する言語と表情の対応について理解していること (Michalson & Lewis, 1985; 櫻庭・今泉, 2001)、2, 3 歳～5, 6 歳頃には状況から情動を理解する能力や推測する能力が発達すること (森野, 2010; DeConti & Dickerson, 1994) など、情動を理解する乳幼児の能力が明らかになっている。また、情動の調整に関して金丸 (2017) は、乳幼児期における情動調整についての発達プロセスを概観するため、Kopp (1982, 1989) によって示された乳幼児期の子どもの情動調整における内在的プロセス、すなわち子どもが自分自身で行うことができる情動調整の発達プロセスを示している。それは、出生後から見られる反射も情動調整の手段となっているというものであり、3 ヶ月頃から可能になる不快刺激から視線をそらすことや、モノを操作することも不快を軽減させることに貢献すること、1 歳後半から 2 歳代には不快さの原因を積極的に取り除いたり、自分の内的状態をモニターする手段として言葉を使用すること、3 歳代以降には自分で情動や行動の調整が可能になるというプロセス

である。こうした発達初期の情動調整に関する実証研究として 18 ヶ月児と 24 ヶ月児の縦断的観察によって情動制御の発達的变化を示した坂上 (1999) の研究や、2 歳から 3 歳の情動調整の発達プロセスを示した金丸・武藤 (2004, 2006) の研究がある。

このように情動理解や情動調整は乳幼児期からの発達について研究されてきているものの、情動理解や情動調整をその一部分とする情動コンピテンスという概念から検討している研究は見当たらない。そうしたなか、西元 (2022) は幼児の情動コンピテンスについて検討することを目的として他者評定型の幼児用情動コンピテンス尺度を作成している。

幼児用情動コンピテンス尺度は改訂版 WLEIS、中学生用 J-WLEIS、児童版情動知能尺度の下位尺度を整理し、幼児用の尺度を作成するために 5 つの下位尺度 (「自己の情動の評価と表現」「自己の情動の調整」「自己の情動の利用」「他者の情動の評価と認識」「他者の情動の調整」) を抽出し、それぞれの下位尺度ごとに 4 項目 (計 20 項目) の原案が作成され、3 歳児から 5 歳児の園児の養育者およびその担当保育者を対象とした調査が行われている。調査から得られたデータを用いた因子分析の結果からは、原案作成時の下位尺度と同じく 5 因子構造 (「他者の情動評価と調整」「他者の情動認識」「自己の情動表現」「自己の情動調整」「自己の情動利用」) が確認されている。

幼児用情動コンピテンス尺度が他の情動コンピテンスと異なる点がある。それは評定が養育者や保育者といった他者によるものであるということである。対象が幼児であることから対象児をよく知っている他者として養育者と保育者が評定者として想定されるわけであるが、両者は対象児の様子を見る場面が家庭と集団保育の場という違いがあり、対象児との関係性も異なる。また、対象児の行動についても家庭と集団保育の場という環境の違いや、親に対する行動や親の前で見せる行動と保育者に対する行動や保育者に見せる行動は異なることも考えられる。そのため、幼児用情動コンピテンス尺度を用いる上で他者評価型尺度である幼児用情動コンピテンス尺度の評定者間の比較を行うことが必要である。

一方で、幼児用情動コンピテンス尺度の妥当性についても検証が必要である。情動コンピテンスは生得的な要因と養育などの反応、関わりによって獲得されていくことが指摘されている (則近, 2021)。また情動調整に関連するものとして金丸 (2017) は神経生理的メカニズム、気質、表象、記憶、実行機能、言語などの認知的能力の関連を挙げている。情動コンピテンスの要因は多岐にわたるが、そのなかでも乳幼児の情動コンピテンスを

検討する上で生得的な要因である気質との関連を検討することは情動コンピテンスの発達を捉える上で有用であるとともに、幼児用情動コンピテンス尺度で測定された情動コンピテンスと気質との関係を検討することは妥当性の検証につながると考えられる。

気質とは生後間もなくからみられるものであり、その定義はさまざまであるが Rothbert & Derryberry (1981) は、活動性、情動性、注意の領域における反応性、自己制御における体質的な個人差と定義している。また、Rothbert & Bates (2006) は質問紙で測定される 15 の気質下位尺度を包括する気質次元として、外向性・高潮性 (Extraversion/Surgency)、否定的情動性 (Negative Affectivity)、エフォートフル・コントロール (Effortful Control) の 3 つを挙げている。エフォートフル・コントロールとは注意の転換、注意の焦点化、抑制コントロールにおける個人差であるが、Eisenberg, Hofer, Sulik, & Spinrad (2014) はエフォートフル・コントロールの違いによって情動調整タイプを分類し、情動調整と気質とが密接な関係にあることを示している。適応的な情動調整タイプはエフォートフル・コントロールが適度に働いて衝動を抑えることができ、適応的な反応が可能であるのに対して、過剰調整タイプではエフォートフル・コントロールの低さと衝動性の低さがあり、過少調整タイプはエフォートフル・コントロールの弱さと衝動性の高さがあることが示されている。

以上のことから、本研究の目的は幼児期を対象とした情動コンピテンスを研究していくために幼児用情動コンピテンス尺度について検討することであり、具体的にはまず評定者間の比較および評定者間の関連についての検討すること、次に幼児用情動コンピテンス尺度と気質尺度との関連について検討を行うことである。

Ⅱ 方法

対象 関西圏にある私立認定こども園 2 園に通う 2022 年度 3 歳児クラスに在籍している園児の養育者および 2 園における 3 歳児クラス 4 クラスの担当保育者 (クラス担任) 4 名を調査対象とした。本研究では欠損値のない 62 名 (男児 30 名、女児 32 名) 分の回答を分析対象とした。

手続き 認定こども園に通う園児の養育者に「幼児用情動コンピテンス尺度」と「気質尺度」への回答を求めた。調査方法は紙媒体による質問紙調査もしくは Web 調査 (Google フォーム) であり、調査協力の承諾書において調査方法の希望を確認した。担当保育者には担当クラスの養育者への依頼状および質問紙 (Web 調査の場合には QR コードを記載した依頼状) の配付と回収

を依頼するとともに、担当クラスの園児全員について「幼児用情動コンピテンス尺度」への回答を求めた。担当保育者は 20 代 3 名、30 代 1 名であり、経験年数は 2 ～ 11 年であった。養育者の調査時期は 2022 年 9 月～ 10 月、保育者は 2022 年 10 月～ 12 月であった。

質問紙 幼児用情動コンピテンス尺度：改訂版 WLEIS (野崎, 2017)、中学生用 J-WLEIS (豊田・桜井, 2007)、児童版情動知能尺度 (豊田・吉田, 2012) に基づいて作成した「幼児用情動コンピテンス尺度」(西元, 2022) (20 項目) を用いた。回答は「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の 6 件法 (1～6 点) である。西元 (2022) は認定こども園に通う 3 歳児から 5 歳児の養育者と 3 歳児から 5 歳児を担当している保育者に「幼児用情動コンピテンス尺度」への回答を求め、そのデータに基づく因子分析結果から「他者の情動評価と調整」因子 (5 項目)、「他者の情動認識」因子 (3 項目)、「自己の情動表現」因子 (4 項目)、「自己の情動調整」因子 (4 項目)、「自己の情動利用」因子 (4 項目) の 5 因子構造を確認している。また、確認された 5 因子における各項目の評価点の平均を因子得点として用いており、本研究でも同様に因子得点を算出することとした。

気質尺度：15 の下位尺度 (快 (低度)、微笑みと笑い、抑制のコントロール、知覚的鋭敏性、反応性の低下／なだまりやすさ、注意の焦点化、快 (高度)、活動性レベル、接近／肯定的な予測、衝動性、不快、怒り／欲求不満、恐れ、かなしさ、内気) で構成されている CBQ Short Form (Putnam & Rothbart, 2006) (94 項目) の日本語版 (沼田, 2006) を用いた。回答は「ぜんぜんあてはまらない」「あてはまらない」「少しあてはまらない」「どちらでもない」「少しあてはまる」「あてはまる」「よくあてはまる」の 7 段階 (1～7 点) と「判断できない」であり、下位尺度ごとの平均点を下位尺度得点として用いた。また、西元 (2012) によって下位尺度得点を用いた因子分析の結果 3 因子構造 (「自己コントロール」, 「否定的情動性」, 「高潮性」) が確認されているため、各因子に含まれる下位尺度得点の平均を因子得点として用いた。なお、この 3 因子は Rothbert & Bates (2006) によって示された気質下位尺度を包括する 3 つの気質次元である否定的情動性、外向性・高潮性、エフォートフル・コントロールに対応することから、本研究においては因子名について「自己コントロール」は「エフォートフル・コントロール」, 「高潮性」は「外向性・高潮性」とした。「エフォートフル・コントロール」因子は下位尺度の「快 (低度)」「微笑みと笑い」「抑制のコントロール」「知覚的鋭敏性」「反応性の低下／なだまりやす

さ」「注意の焦点化」から構成され、「否定的情動性」は「不快」「怒り／欲求不満」「恐れ」「かなしさ」、「外向性・高潮性」は「快（高度）」「活動性レベル」「接近／肯定的な予測」「衝動性」によって構成されている。なお、「内気」は因子分析において十分な負荷量を示さなかったことから因子得点からは除外されているため、本研究においても 3 因子構造で検討する際には除外している。

倫理的配慮 調査協力園には研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守を口頭で説明し、養育者に対する調査への協力および保育者に対する調査へ協力の同意を得た。調査対象となる養育者に対しては、事前に研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守について対面での説明会を行った上で、紙面にて改めて説明を行い研究協力同意書の提出を求めた。同意する場合には調査方法（質問紙調査もしくは Web 調査）の選択を求め、同意の意思が確認された場合のみ調査対象とした。質問紙調査、Web 調査ともに氏名の記載は求めず、Web 調査においてはメールアドレスの収集も行っていない。なお、本調査は縦断研究として計画し実施しているものであることから、同意する養育者には研究同意書に自ら作成した ID（アルファ

ベット 3 文字と数字 3 桁の組み合わせ）の記載を求め、その ID をもって縦断データの照合を行うこととした。また、保育者には回答の際に園児の ID（こちらで設定した識別番号。養育者の ID とは異なるものであり、養育者 ID と保育者 ID の照合リストは研究者が管理）の記載を求め、その ID をもって養育者データとの照合および縦断データの照合を行うこととした。本研究の質問紙調査は上記の手順も含めて、関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認（承認番号 22-16）を受け実施されたものである。

III 結果

情動コンピテンス得点における評定者間の差の検定および相関関係

幼児用情動コンピテンス尺度（20 項目）の各項目に対する養育者と保育者の評定を比較するため Wilcoxon の符号順位検定を行った。養育者、保育者それぞれの中央値、四分位範囲および検定結果を Table 1 に示す。

情動コンピテンス因子得点については、「他者の情動評価と調整」「他者の情動認識」「自己の情動利用」に有意差がみられ、いずれの得点も養育者得点のほうが保育者得点よりも高いことが示された ($Z = -4.72, p < .001, r$

Table 1 幼児用情動コンピテンス尺度評価点 養育者と保育者の各項目点の中央値、四分位範囲、Wilcoxon の符号順位検定結果 (n = 62)

	中央値 (四分位範囲)		Wilcoxon の 符号順位検定	
	養育者	保育者	Z 値	r
他者の情動評価と調整	4.40 (3.75-5.05)	3.40 (3.00-4.00)	-4.72 ***	.424
18) 周りの人が喜ぶようなことをする。	5.00 (4.00-5.25)	4.00 (4.00-4.00)	-3.91 ***	.351
17) 周りの人が悲しい気持ちになったり、不安な気持ちになっていると、その気持ちを何とかしようとする。	4.00 (3.75-5.25)	3.00 (2.75-4.00)	-4.66 ***	.418
20) 周りの人を楽しませることができる。	5.00 (4.00-6.00)	4.00 (4.00-5.00)	-4.11 ***	.369
19) 周りの人が怒ったり興奮していると、自分なりの方法で落ち着かせようとする。	4.00 (3.00-5.00)	3.00 (2.00-4.00)	-3.39 **	.305
16) 周りの人の元気がないとすぐ気づく。	4.00 (3.00-5.00)	3.00 (3.00-4.00)	-4.03 ***	.362
他者の情動認識	4.33 (3.58-5.00)	3.00 (3.00-3.42)	-4.84 ***	.434
14) 周りの人の気持ちをとても気にしている。	4.00 (3.00-5.00)	3.00 (3.00-3.00)	-4.12 ***	.370
15) 周りの人の気持ちの変化に敏感である。	4.00 (3.00-5.00)	3.00 (3.00-3.00)	-3.68 ***	.331
13) 周りの人がどんな気持ちなのかを感じとっている。	5.00 (4.00-6.00)	4.00 (3.00-4.00)	-5.09 ***	.457
自己の情動表現	5.00 (4.25-5.75)	5.00 (4.00-5.50)	-1.39 n.s.	.125
2) 嫌な気持ちの時にはその気持ちをことばや表情等以外の方法で表す。	5.00 (3.00-6.00)	5.00 (4.00-6.00)	-1.26 n.s.	.113
3) 自分の気持ちをことばや表情で表している。	6.00 (5.00-6.00)	5.00 (4.00-6.00)	-2.93 **	.263
1) うれしい時や悲しい時にはその気持ちをことばや表情等で表している。	6.00 (6.00-6.00)	5.00 (4.00-6.00)	-4.49 ***	.403
4) その時の自分の気持ちを自分なりの何らかの方法（ことばや表情以外）で表している。	5.00 (4.00-6.00)	4.00 (4.00-5.00)	-1.77 n.s.	.016
自己の情動調整	3.50 (3.00-4.5)	3.75 (3.19-4.25)	-.068 n.s.	.006
6) 怒ったり、興奮したりしてもすぐに落ち着くことができる。	3.00 (3.00-5.00)	4.00 (3.00-4.00)	-0.79 n.s.	.007
8) 嫌なことがあってもすぐに気持ちを切り替えることができる。	4.00 (3.00-5.00)	3.00 (3.00-4.00)	-0.92 n.s.	.830
7) 困ったことがあってもあわてたり、大騒ぎしない。	4.00 (2.00-5.00)	4.00 (3.00-5.00)	-.789 n.s.	.071
5) 自分の気持ちをがまんすることができる。	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (3.00-5.00)	-.571 n.s.	.051
自己の情動利用	5.00 (4.50-5.25)	4.5 (4.00-5.00)	-2.99 **	.268
10) 褒められたり励まされたりすると、がんばろうとする。	6.00 (5.00-6.00)	5.00 (4.00-6.00)	-2.38 *	.214
9) どんなことにも積極的にやろうとする。	5.00 (4.00-5.00)	4.50 (4.00-5.00)	-4.08 n.s.	.037
11) 何かするときには目標をたてて、それにむかってがんばっているようだ。	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-4.00)	-2.36 *	.212
12) 機嫌のいい時にはお手伝いや自分がやらなくてはならないこと等を積極的にする。	6.00 (5.00-6.00)	4.50 (4.00-5.25)	-4.29 ***	.386

太字は因子得点

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

=.424; $Z = -4.84, p < .001, r = .434$; $Z = -2.99, p < .01, r = .288$ 。また、各項目の評価点については20項目中13項目に有意差(養育者>保育者)が示された。有意差がみられなかった項目は「他者の情動表現」因子の「2) 嫌な気持ちの時にはその気持ちをことばや表情等以外の方法で表す。」「4) その時の自分の気持ちを自分なりの何らかの方法(ことばや表情以外)で表している。」「自己の情動調整」因子の「6) 怒ったり、興奮したりしてもすぐに落ち着くことができる。」「8) 嫌なことがあってもすぐに気持ちを切り替えることができる。」「7) 困ったことがあってもあわてたり、大騒ぎしない。」「5) 自分の気持ちをがまんすることができる。」「自己の情動利用」因子の「9) どんなことにも積極的にやろうとする。」の7項目であった。

養育者評定と保育者評定の情動コンピテンス因子得点について、Spearmanの順位相関係数を用いて分析を行った結果、有意な相関関係はみられなかった。各項目の評価点で分析したところ「11) 何かするときには目標をたてて、それにむかってがんばっているようだ。」の1項目についてのみ弱い相関関係($\rho = .28, p < .001$)が有意であった。

情動コンピテンス得点と気質得点との相関関係

情動コンピテンス因子得点と気質因子得点についてSpearmanの順位相関係数を用いた分析を行った。その結果をTable 2に示す。

養育者評定による情動コンピテンス因子得点の「他者の情動評価と調整」「自己の情動調整」「自己の情動利用」は気質因子得点の「エフォートフル・コントロール」との間に正の相関($\rho = .426, p < .01$; $\rho = .483, p < .01$; $\rho = .431, p < .01$)、情動コンピテンス因子得点の「他者の情動認識」と気質因子得点の「エフォートフル・コントロール」との間には弱い正の相関($\rho = .329, p < .01$)が有意であった。また、情動コンピテンス因子

得点の「他者の情動認識」「自己の情動調整」は気質因子得点の「外向性・高潮性」との間に弱い負の相関($\rho = -.303, p < .05$; $\rho = -.354, p < .01$)が有意であった。情動コンピテンス因子得点の「自己の情動表現」と有意な相関がみられた気質因子得点はなく、気質因子得点の「否定的情動性」と有意な相関がみられた情動コンピテンス因子得点はなかった。

保育者評定による情動コンピテンス因子得点と気質因子得点の間では、「他者の情動認識」と「エフォートフル・コントロール」との間に弱い正の相関が有意であった($\rho = .261, p < .05$)が、それ以外の有意な相関はみられなかった。

情動コンピテンス因子得点と気質因子得点との関係をさらに検討するため、情動コンピテンス因子得点と気質下位尺度得点についてもSpearmanの順位相関係数を用いて分析した(Table 3)。

養育者評定による情動コンピテンス因子得点の「他者の情動評価と調整」は気質因子「エフォートフルコントロール」に含まれる下位尺度「抑制のコントロール」「知覚的鋭敏性」「反応性の低下・なだまりやすさ」との間に弱い正の相関($\rho = .359, p < .01$; $\rho = .317, p < .05$; $\rho = .390, p < .01$)、気質因子「否定的情動性」に含まれる下位尺度「怒り・欲求不満」との間には弱い負の相関($\rho = -.260, p < .05$)がみられた。情動コンピテンス因子得点の「他者の情動認識」は気質因子「エフォートフル・コントロール」に含まれる下位尺度「抑制のコントロール」と間に弱い正の相関($\rho = .368, p < .01$)、気質因子「外向性・高潮性」に含まれる下位尺度「衝動性」との間には弱い負の相関($\rho = -.354, p < .01$)がみられ、情動コンピテンス因子得点の「自己の情動表現」は気質因子「エフォートフル・コントロール」に含まれる下位尺度「快(低度)」との間に弱い正の相関($\rho = .329, p < .01$)がみられた。情動コンピテンス因子得点の「自

Table 2 情動コンピテンス因子得点と気質因子得点との相関係数(Spearmanの順位相関係数)($n = 62$)

			気質		
			エフォートフル・コントロール	外向性・高潮性	否定的情動性
情動 コンピ テンス	養育者	他者の情動評価と調整	.426**	-.204	-.092
		他者の情動認識	.329**	-.303*	-.014
		自己の情動表現	-.018	.189	.162
		自己の情動調整	.483**	-.354**	-.163
		自己の情動利用	.431**	.206	.143
	保育者	他者の情動評価と調整	.119	-.099	.056
		他者の情動認識	.261*	-.206	.182
		自己の情動表現	.030	.227	.150
		自己の情動調整	.133	-.186	-.001
		自己の情動利用	.005	-.161	-.004

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3 情動コンピテンス因子得点と気質下位尺度得点との相関係数 (Spearman の順位相関係数) (n = 62)

		他者の情動評価 と調整	他者の 情動認識	自己の 情動表現	自己の 情動調整	自己の 情動利用
エ フ ォ ー ト フ ル ・ コ ン ト ロ ー ル	快 (低度)	-.036	.028	.329**	-.027	.125
	微笑みと笑い	.244	.031	.058	.230	.180
	抑制のコントロール	.359**	.368**	-.096	.421**	.137
	知覚的鋭敏性	.317*	.128	.034	.155	.341**
	反応性の低下・なだまりやすさ	.390**	.244	-.168	.510**	.283*
	注意の焦点化	.210	.216	-.023	.268*	.333**
養 育 者	外向性・ 高潮性					
	快 (高度)	-.117	-.112	.052	-.145	.237
	活動性レベル	-.116	-.181	.167	-.285*	.193
	接近・肯定的な予測	-.181	-.244	.105	-.248	.122
情 動 性 的	衝動性	-.167	-.354**	.153	-.389**	-.064
	不快	-.091	.037	.173	-.202	-.137
	怒り・欲求不満	-.260*	-.129	.110	-.385**	-.122
	恐れ	.124	.180	.060	.115	-.032
保 育 者	かなしさ	.009	.158	-.051	-.049	-.022
	内気	-.178	-.054	.026	.112	-.117
	外向性・ 高潮性					
	快 (高度)	-.105	-.162	.175	-.129	-.099
情 動 性 的	活動性レベル	-.141	-.214	.201	-.200	-.220
	接近・肯定的な予測	.056	.098	.136	-.087	-.080
	衝動性	-.032	-.195	.167	-.058	-.069
	不快	.012	.121	.044	.027	-.046
保 育 者	怒り・欲求不満	-.095	-.043	-.022	-.030	.058
	恐れ	.210	.333**	.027	.087	.134
	かなしさ	.037	.211	.015	.114	.039
	内気	-.091	.226	-.112	.136	.262*

* $p < .05$, ** $p < .01$

己の情動調整」は気質因子「エフォートフル・コントロール」に含まれる下位尺度「抑制のコントロール」「反応性の低下・なだまりやすさ」との間に正の相関 ($\rho = .421, p < .01$; $\rho = .510, p < .01$)、「注意の焦点化」との間に弱い正の相関 ($\rho = .268, p < .05$) がみられ、気質因子「外向性・高潮性」に含まれる下位尺度「活動性レベル」「衝動性」、気質因子「否定的情動性」に含まれる下位尺度「怒り・欲求不満」との間には弱い負の相関 ($\rho = -.285, p < .05$; $\rho = -.389, p < .01$; $\rho = -.385, p < .01$) がみられた。情動コンピテンス因子得点の「自己の情動利用」は気質因子「エフォートフル・コントロール」に含まれる下位尺度「知覚的鋭敏性」「反応性の低下・なだまりやすさ」「注意の焦点化」との間に弱い正の相関 ($\rho = .341, p < .01$; $\rho = .283, p < .05$; $\rho = .333, p < .01$) がみられた。

保育者評定については情動コンピテンス因子得点の「他者との情動評価と調整」と気質因子「エフォートフル・コントロール」に含まれる下位尺度「抑制のコン

ロール」との間に弱い正の相関 ($\rho = .328, p < .01$)、情動コンピテンス因子得点の「他者の情動認識」と気質因子「エフォートフル・コントロール」に含まれる下位尺度「抑制のコントロール」との間に弱い正の相関 ($\rho = .392, p < .01$)、気質因子「否定的情動性」に含まれる下位尺度「恐れ」との間に弱い正の相関 ($\rho = .333, p < .01$) がみられた。また、情動コンピテンス因子得点の「自己の情動利用」と気質下位尺度「内気」との間に弱い正の相関 ($\rho = .262, p < .05$) がみられた。

IV 考 察

評定者間の比較・評定者間の関連

情動コンピテンス尺度によって測定された情動コンピテンスのうち「他者の情動評価と調整」「他者の情動認識」「自己の情動利用」は養育者のほうが保育者よりも高い得点となることが示された。「他者の情動評価と調整」は周りの人の情動を認識した上でそれに適切な反応をすることがどの程度あるのかを問う質問項目、「他者

の情動認識」は周りの人の気持ちに関心を払っている程度や人の気持ちを感じ取っている程度を問う質問項目、「自己の情動利用」は積極的な行動が情動によって後押しされている程度、また自分の気持ちをコントロールして積極的にものごとに取り組もうとしている程度を問う質問項目からなる。

対象児が他者の気持ちを感じ取っているのか否かはその対象児の日常における他者との関わりから判断されるものであり、その際に評定者の気づきも必要となる。他者が喜ぶことをしている、楽しませているというのは評定者の主観によるところも大きい。他者の元気がないことに気づくということも、まず評定者自身が元気がない他者がいることを認識し、その上で対象児がどうしているかを認識しなくてはならない。則近（2021）によると、養育者は、情動をどのように感じるべきか、表出すべきか、どうふるまうべきかなど、情動にまつわる個人の信念であるメタ情動観によって、自分の情動や子どもの情動を評価したり、制御しようとするため、子どもの情動表出に対する考え、評価はそれぞれのメタ情動観によって異なることを指摘している。「気持ち」は目に見えないものであるため、それを感じ取っているか否かは推測であり、ポジティブな気持ちによってがんばろうとしているかどうかを判断するには、評定者自身が対象児のポジティブな気持ちを推測できていなくてはならない。評定者自身が対象者の情動についてどの程度注意を払っているのか、認識できているのかが評定に影響するのである。

養育者は日常的に対象児についてよく観察し、その気持ちを推測しようとしているだろうし、保育者も保育活動において子どもを理解することが必要不可欠なため、よく観察し、その気持ちを推測しようとしていると考えられるが、集団における子どもとの関わり、子どもへの視点は、養育者の我が子との関わり、視点とは異なると思われる。他者の情動を評価しているかどうか、認識しているかどうかの指標（判断材料）となるのは対象児の表情の変化や反応の違いが考えられるが、そうした指標の強度には個人差があり、わかりやすい反応や変化が見られる子どももいれば、非常に些細な反応、変化しか見られない場合も考えられる。そうした些細な指標は保育者には認識しにくいかもしれないし、あるいは養育者は些細な指標からも拡大して子どもの気持ちの推測を行っているかもしれない。さらに、家庭と集団保育の場では対人的な環境が大きく異なる。集団保育の場においては、多数の同年齢の子どもとの関わりが主であり、家庭では少人数の大人あるいはきょうだいとの関わりとなる。そうした場面の違いは他者の情動を評価し調整した

り、認識したりする必要性の違いになるとともに、その場での人との関わり方を規定するものでもある。また、養育者と保育者の評定に全く相関関係がみられなかったことから、養育者が見ている子どもの姿と保育者が見ている子どもの姿はかなり異なるのではないだろうか。

幼児の情動コンピテンスを質問紙で測定しようとするならば、その評定は日常的に対象児を見ている他者である養育者あるいは保育者となるが、その両者によって測定される情動コンピテンスはかなり異なることが示された。このことは幼児の情動コンピテンスとして測定される行動特性が場面や対人環境によって異なることを示唆していると考えられる。幼児の情動コンピテンスを測定する際には、どのような場面でどのような対象に対して情動コンピテンスが発揮されるのか、その場面による違い、対象による違いということを踏まえて考察していくことが必要である。

情動コンピテンスと気質

情動コンピテンスの5つの構成要素（因子）のうち、養育者評定による「他者の情動評価と調整」「自己の情動調整」「他者の情動認識」「自己の情動利用」の4つの要素の高さと気質因子である「エフォートフル・コントロール」の高さの関連が示された。Eisenbergら（2014）によってエフォートフル・コントロールが適度に働いているタイプは適応的な情動調整タイプとされているように、「他者の情動評価と調整」「自己の情動調整」「自己の情動利用」といった情動調整に関連した情動コンピテンスの要素との関連が示されたことは、幼児用情動コンピテンス尺度の妥当性が示されたと言えよう。気質下位尺度レベルでみると、「他者の情動評価と調整」は「抑制のコントロール」「知覚的鋭敏性」「反応性の低下・なだまりやすさ」と、「他者の情動認識」は「抑制のコントロール」と、「自己の情動表現」は「快（低度）」と、「自己の情動調整」は「抑制のコントロール」「反応の低下・なだまりやすさ」「注意の焦点化」と、「自己の情動利用」は「知覚的鋭敏性」「反応の低下・なだまりやすさ」「注意の焦点化」と関連している。水野（2018）は学齢期（7、8歳）の子どもについて、気質的個人差と情動制御を含めた自己制御行動との関連を検討し、抑制コントロール、注意の焦点化、知覚鋭敏性といった気質が対人場面での自己制御行動を促進する報告で働くことを示しており、本研究はその結果と一致するものである。自他の情動の調整に抑制のコントロールの高さが関わっているということや、自分の情動を調整する力、うまく気持ちを利用してがんばることができる力には注意の焦点化の高さが関わっているということも妥当な結果

と言える。ただし、こうした結果は養育者が評定した結果にのみ当てはまることであり、保育者評定においては「他者との情動認識」との関連が示されたのみであることから、保育者が評定する情動コンピテンスの解釈には注意が必要である。評定者間の比較および関連の検討では、養育者と保育者の評定結果の違いが示され、保育者の評定結果からは気質との関連が見いだせなかったことから、保育場面で見られる幼児の情動に関わる能力は、生得的基盤による部分よりも集団保育のなかで学習した部分が多いのかもしれない。保育者評定の扱いについては、さらに他の要因との関連を踏まえて検討していく必要がある。

養育者評定による情動コンピテンスについては「エフォートフル・コントロール」以外の気質因子との関連も示された。情動コンピテンスの構成要素である「他者の情動認識」と「自己の情動調整」については、気質因子である「外向性・高潮性」と負の相関関係がみられ、気質下位尺度レベルでみると自己の情動調整は活動性レベルおよび衝動性の負の相関関係、すなわち、活動性レベルの高い子どもや衝動性の高い子どもはすぐに落ち着く、我慢するといった様子がみられない、あるいはすぐに落ち着いたり我慢できる子どもは活動性レベルや衝動性が低いということが示された。水野 (2018) は衝動性が自己抑制的の自己制御行動をとりにくくしていることを示している。また、本郷・平川・高橋・飯島 (2021) は 4 歳から 6 歳の幼児の情動発達と行動特徴との関連を明らかにすることを目的として、保育所および認定こども園のクラス担任による在籍園児全員についての情動表現および行動特性に関する質問項目への評定結果から、行動統制の困難さ傾向の高い子どもは行動統制とともに情動の統制が難しいことを明らかにしている。本郷ら (2021) の研究で用いられている行動統制の困難さ傾向に含まれる行動特徴は「他者にちょっかいをだす」「いけないとわかっているのに、ついついやってしまう」「椅子に座っている時に、他児に話しかける」など、活動性や衝動性の高さを示すような行動特徴である。したがって、活動性レベルや衝動性の高い子どもは他者の気持ちの理解が不得手であったり、自分の気持ちをうまく調整することができるという今回の結果は妥当といえるだろう。活動的であることや衝動的であることが他者の気持ちの理解や自分の気持ちの調整を阻害するものであるのか、自分の気持ちの調整ができるからこそ衝動的な行動がみられないのかについては、今後さらに考えていく必要がある。

養育者評定においてはさらに、気質下位尺度レベルでの結果からは気質因子レベルではみられなかった関連も

みられた。気質因子「否定的情動性」では情動コンピテンスとの関連が示されなかったが、「否定的情動性」に含まれる気質下位尺度「怒り・欲求不満」は情動コンピテンスを構成する「他者の情動評価と調整」「自己の情動調整」と負の相関関係が示された。「怒り・欲求不満」はイライラの表れやすさであり、行っている行動や目標を妨害されたときの否定的感情の程度を表すものである。自他の情動調整が不得手であることとイライラしやすい特性が関連していることも妥当な結果である。

幼児用情動コンピテンス尺度について評定者における課題や気質との関連が明らかになった。養育者評定、保育者評定がそれぞれどのような子どもの姿を反映しているのか、評定者間の違いは評定者が見ている場面や関係性によるものだとすれば、家庭での子どもの姿、集団保育の場での子どもの姿は何によってもたらされているのかは今後検討すべき課題である。また、保育者評定については、保育者 1 人が担当園児全員の評定を行っているということによる評定の精度の問題も考えられることから、複数の保育者による評定結果を用いて検討することも必要であろう。今回の結果は該当園児に対する 1 人の保育者の評定に基づいて検討していることから、この結果を普遍的な保育者評定として解釈するにはデータとして不十分である。本研究は縦断研究として計画した調査の一部であり、4 歳児、5 歳児においても同様に調査を行っている。4 歳児、5 歳児における担当保育者は今回の調査対象とは異なる可能性が高いことから、今後、異なる保育者の評定を用いた養育者との比較を行い、評定者間の相違やそれぞれの評定がどのような子どもの姿を反映しているものなのかについてさらなる検討が必要である。

情動コンピテンスの高さは人生満足度の高さや自尊心の高さと関連することや、ストレス経験時のストレスの度合いが低いことが成人の対象とした研究で示されており適応と関わりが深いものである。情動コンピテンスは成人を対象とした研究が多いが、生涯にわたる適応について考える上で、発達初期からの情動理解の発達研究、情動調整の発達研究に加えて、情動コンピテンスの発達プロセスや発達要因について検討していくことが必要である。今後、情動コンピテンスの発達やその要因について幼児期を対象とした研究が発展することを期待する。

付記

本研究は JSPS 科研費 (JP19K02656) の助成を受けて実施した研究の一部です。本研究にご協力いただきました認定こども園の保護者の皆様ならびに保育者の皆様に心より感謝い

たします。

引用文献

- Kopp, C. B. (1982). Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, **18**, 199-214.
- Kopp, C. B. (1989). Regulation of Distress and Negative Emotions: A Developmental View. *Developmental Psychology*, **25**, 343-354.
- DeConti, K. A., & Dickerson, D. J. (1994). Preschool children's understanding of the situational determinants of other's emotions. *Cognition and Emotion*, **8**, 453-472.
- Eisenberg, N., Hofer, C., Sulik, M. J. & Spinrad, T. L. (2014). Self-regulation, effortful control, and their socioemotional correlates. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation* (2nd ed., pp.157-172). The Guilford Press.
- 本郷一夫・平川久美子・高橋千枝・飯島典子 (2021). 幼児期における情動発達と行動特徴との関連. *発達支援学* **2**, 41-58.
- 金丸智美 (2017). 乳幼児期における情動調整の発達. *淑徳大学研究紀要. 総合福祉学部・コミュニティ政策学部*. **51**, 51-66.
- 金丸智美・無藤 隆 (2004). 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差. *発達心理学研究*. **15**, 183-194.
- 金丸智美・無藤 隆 (2006). 情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達の变化. *発達心理学研究*. **17**, 219-229.
- Kotsoni, E. de Haan, M., & Johnson, M. H. (2001). Categorical perception of facial expressions by 7-month-old infants. *Perception*, **30**, 1115-1125.
- Ludermann, P. M., & Nelson, C. A. (1988). Categorical representation of facial expressions by 7-month-old infants. *Developmental Psychology*, **24**, 492-501.
- Lopes, P. N., Salovey, P., Côté, S., & Beers, M. (2005) Emotion regulation abilities and the quality of social interaction. *Emotion*, **5**, 113-118.
- Mayer, J., Caruso, D. R., & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, **27**, 267-298.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. (pp.3-31). New York: Basic Books.
- Mayer, J. D., Salovey, P., Caruso, D. R., & Sitarenios, G. (2003). Measuring emotional intelligence with the MSCEIT v 2.0. *Emotion*, **3**, 97-105.
- Michalson, L., & Lewis, M. (1985). What do children know about emotions and when do they know it? In Lewis, M., & Saarni, C. (Eds.), *The Socialization of Emotions* (pp.117-139). New York: Plenum Press.
- 水野里恵 (2018). 学齢期の子どもの対人場面での自己制御行動：情動反応性・情動制御性における気質的個人差との関連. *日本心理学会第82回大会発表論文集*, 765.
- 森野実央 (2010). 幼児期における感情理解. *心理学評論*. **53**, 20-32.
- 則近千尋 (2021). 養育および親の情動の社会化と子どもの情動コンピテンスに関する近年の研究動向. *東京大学大学院教育学研究科紀要*. **61**, 375-380.
- 西元直美 (2012). 幼児の集団場面における適応行動に関する研究. IV - 擬適応行動の個人内変動と気質との関連 - *日本発達心理学会第23回大会発表論文集*, 417.
- 西元直美 (2022). 幼児用情動コンピテンス尺度の作成. *関西福祉科学大学紀要*. **26**, 69-77.
- 野崎優樹 (2017). 情動コンピテンスの成長と対人機能. 社会的認知理論からのアプローチ. ナカニシヤ出版.
- 沼田 宙 (2006). 認知的個人差と気質の関係に関する一研究. 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科修士論文.
- Petrides, K. V., & Furnham, A. (2003). Trait emotional intelligence: Behavioral validation in two studies of emotion recognition and reactivity to mood induction. *European Journal of Personality*, **17**, 39-57.
- Putnam, S. P., & Rothbart, M. K. (2006). Development of short and very short forms of the Children's Behavior Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, **87**, 102-112.
- Rothbart, M. K. and Bates, J. E. (2006). Temperament. In: Damon, W. and Eisenberg, N. (Eds.), *Handbook of Child Psychology: Volume 3, Social, Emotional, and Personality Development* (6th Ed., pp.105-176). Wiley, New York.
- Rothbart, M. K., & Derryberry, D. (1981). Development of individual differences in temperament. In Lamb, M. E. & Brown, A. L. (Eds.), *Advances in Developmental Psychology*, (Vol.1., pp.33-86). Hillsdale, NJ: Earlbaum.
- 櫻庭京子・今泉敏 (2001). 2~4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較. *発達心理学研究*. **12**, 36-45.
- Salovey, P., & Mayer, D. (1990). Emotional intelligences. *Imagination Cognition and Personality*, **9**, 185-211.
- 坂上裕子 (1999). 歩行開始期における情動制御：問題解決場面における対処行動の発達. *発達心理学研究*. **2**, 99-109.
- Schutte, N. S., Malouff, J. M., Bobik, C., Coston, T. D., Greeson, C., Jedlicka, C., Rhodes, E., & Wendorf, G. (2001). Emotional intelligence and interpersonal relations. *Journal of Social Psychology*, **141**, 523-536.
- Smith, L., Ciarrochi, J., Heaven, P. C. L. (2008) The stability and change of trait emotional intelligence, conflict communication patterns, and relationship satisfaction: A one-year longitudinal study. *Personality and Individual Differences*, **45**, 738-743.
- Takšić, V. (1998). Validacija konstrukta emocionalne inteligencije. [Validation of the Emotional Intelligence Construct]. Unpublished doctoral dissertation, University of Zagreb, Croatia.
- Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. (2007). Development of a Japanese version of the Emotion Skills and Competence Questionnaire. *Perceptual and Motor Skills*, **105**, 469-476.
- 豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治 (2005). 日本語

- 版 ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀要. **54**, 43-47.
- 豊田弘司・桜井裕子 (2007). 中学生用情動知能尺度の開発 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. **16**, 13-17.
- 豊田弘司・山本晃輔 (2011). 日本版 WLEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) の作成 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. **20**, 7-12.
- 豊田弘司・吉田真由美 (2012). 子どもにおける居場所、情動知能及び学校適応 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. **21**, 9-7.
- Wong, C. S., & Law, K. S. (2002). The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The Leadership Quarterly*, *13*, 243-274.
- Young-Browne, G., Rosenfeld, H. M., & Horowitz, F. D. (2013). Infant discrimination of facial expressions. *Child Development*, *48*, 555-562.